

「コロナ禍の先に」



新潟市消防局長 小林 佐登司

本市は、東京から北北西250キロメートル、上越新幹線で約2時間の位置にあります。日本海、信濃・阿賀の両大河、福島潟、鳥屋野潟、ラムサール条約登録湿地である佐潟など、多くの水辺空間と豊かな自然に恵まれ、コハクチョウの越冬数は日本一を誇ります。平成17年には、近隣市町村との合併により、本州日本海側最大の都市となり、国際空港や港湾、新幹線、高速道路網などが整備された交通拠点であると同時に、国内最大の水田面積を持つ大農業都市となりました。

本市の人口は、平成19年の政令市移行時の約80万人から現在は約79万人余りに減少し、少子高齢化が進展しており、併せて財政状況も厳しさを増している中で、市民の安心安全な生活を守る消防サービスの水準を維持・向上することが当消防局に課された重要な責務と考えています。特に、消防サービスを維持するうえで、8行政区のうち市中心部の3区（市域の約24%）に人口の約6割が集中し、8行政区で最大の人口差は約4倍、人口密度では約1.5倍の差があり、各行政区の人口に対する職員数の割合では約2.5倍強の開きとなっており、効率性の観点から人口や消防需要に応じた職員配置が課題となっています。

また、本市では、救急隊の現場到着時間が延伸傾向にあり、政令市では最低水準にあることから、時間短縮には現場の努力だけでは難しいとの判断に至り、令和3年4月から救急隊の配置を強化することとしました。一つ目は、人口が集中する市中心部にある出張所一箇所について、消防隊1隊の配置を止め、救急隊1隊のみの配置に変更します。将来的には、消防隊を1隊配置している隣接出張所に統合することも視野に入れた配置変更です。二つ目は、令和2年度から日勤救急隊を1隊配置し、救急需要の多い日中の出動体制を強化しましたが、更に2隊目の日勤救急隊を配置し日中の救急需要に対応します。三つ目は、郊外の住宅地にある二箇所の出張所について、これまで兼務隊1隊のみを配置していましたが、消防隊1隊、救急隊1隊の配置に強化します。いずれも、現状を分析し、消防力の整備指針の見直しを行う中で現実と向かい合い慎重に検討し、着実に進めてきました。今後も効果を見極め、必要な対策を講じていきます。

今、新型コロナウイルス感染症の拡大は、全世界に大きな影響を与え、既に尊い多くの人命が犠牲となっただけではなく、私達の生活様式や働き方にも大きな影響を与えています。当消防局においても例外ではなく、一般的な感染防止の徹底は当然のことながら、本来の事務室での勤務人員を半分程度とし、他の職員は会議室や作戦室等で分散勤務を行っています。Web会議・研修も増え、多くの行事等がソーシャルディスタンスの確保や感染防止対策が難しいなどの理由で中止や縮小となり、様々な方面に影響が及んでいますが、敢えてコロナ禍だからこそ出来ることもあるとのポジティブな考え方をもち、組織横断的に職員が一丸となってコロナ禍の現状を耐え忍び、乗り越えた先にある明るい未来を信じて、今すべきことを的確に実行していきます。